

**J** **apanese text**

2009年 秋/冬号 日本語編

アート

**アーティスト・インタビュー**

**野村友里——人生とは、食べる旅**

撮影＝坂本正行 文＝清水千佳子

p.113

この夏、『eatrip』というドキュメンタリー映画が静かな注目を集めた。その名のとおり、「人生とは食べる旅」というメッセージが込められた78分の作品で、第33回モントリオール世界映画祭のドキュメンタリー・オブ・ザ・ワールド部門に正式出品された。

映画は早朝の築地市場で働く仲買人から始まり、年代も職業も住む場所もさまざまな人々が登場し、「食」に対する思いを語り、体現していく。そのなかには、俳優の浅野忠信や歌手のUAなど、映画のテーマに共感して出演した著名人も少なくない。彼らが自然体で語る言葉や新鮮な食材、美味しそうな料理の数々は、観客の食への意識を喚起し、食欲中枢を刺激する。実際、観賞後のアンケートには、『お腹が空いた』、『家のご飯が食べたくなったので、まっすぐ帰ります』といったコメントが多いという。

「そんなふうに、食について何かを感じたり、気づいてもらえるとうれしいですね」と語るのは本作の監督、野村友里さん。澄んだ瞳とシャイな笑顔、聡明な語り口を持つ女性だ。フードディレクターを本業とする野村さんは、映画のタイトルと同じ『eatrip』という名のチームを率いて、ケータリングやメニュー開発など、食で人と人をつなぐシーンで広く活躍している。

「今の時代は食も選択肢が多く、その分、あれがいいとか、これがいいとか、いろいろ言われますが、食とはそもそも、もっと根源的なものなのでは、という思いが常々あったんです。私たちはみな、ご年配のかたも赤ちゃんも、同じように食によって生かされている、というような……。食に携わる身として、押しつけではなく、そういうことに気づいてもらえ

たらという思いと、現代の食と人との関係を記録に残したいという思いから、映画を作ることにしました」

もっとも、最初は自ら監督を務めることに戸惑いもあったという。

「普段しているように自分で食材を集めたり、料理をつくりたいのですが、やはり監督を務めながら料理も作るというのはとても難しく。結局、お料理は米沢亜衣さんをお願いし、慣れない監督業に専念させていただきました。いつもの仕事と違い、後に残るものを作るという作業は責任も重く、プレッシャーが大きかったです。また、これは世の中に必要とされているのか？ 共感してもらえるのか？ という、ものづくりに必ずつきまとう葛藤もありました。今はとにかく、映画に関わってくれた人が喜んでくれたので、ほっとしています。10年後、20年後に見直してみても、意味のあるものになっていければ嬉しいです」

詳しくはこちらのHPまで→ <http://eatrip.jp>

**Wafrika——2つの文化が生み出す新たな美**

文＝キャシー・アーリン・ソコール 翻訳＝奥山真澄

p.114

セルジュ・ムアングには、明確な理想がある。国際舞台での受賞経験もある、アフリカのカメルーン生まれのカーデザイナーは、いま日本で伝統的なファッションの可能性を引き出し、文化の相乗作用を生み出そうとしている。この新しい美の形を、彼は「Wafrika (和フリカ)」と呼ぶ。

**デザインというものに、どのように取り組んでいらっしゃいますか？**

**セルジュ・ムアング [以下、SM]**：デザインに携わるとき必要となるのは、理想的な環境は存在すると信じること、ユートピアの存在を思い描くことです。例えば、いま座っているこの空間を見ている、私はすでに自分をより幸せに、より

居心地よく、よりリラックスさせてくれるものの存在に気づいています。デザイナーであれば、自分の目や耳を使って常に環境を変えていこうとするものです。

私がデザインに求める理想像とは、グローバルなスケールで価値と希望を生み出す手段であること。空間を通して、衣服や物を通して希望を生み出すとともに、人がいまだ満たされていない要求に気づくことを目指しています。ひとたびそうしたものに気づけば、人の価値観にもグローバルなスケールで希望を与えることができると思うのです。

人の価値観は、一人一人の心の奥底にあります。手で触れることはできませんが、そうした価値観が、まさにその人をその人たるものになっている。この価値観は、感性に訴えるもの、すなわち空間や衣服、物といった、感覚で理解できるものを介して高めていくことができます。デザインはすべての感覚に影響を与えるものです。すべての感覚を駆使すれば、環境に手を加え、変化させることができるし、その結果互いの中にあるさまざまな「価値」に触れることができます。

**日本とアフリカは、どのような価値を共有していると思いますか？**

**SM**：日本は部族的だと思います。この国のすべての人々の中に、部族的な文化が存在しているのではないのでしょうか。日本人の挨拶の仕方、すなわち相手に対する尊敬の念は、人と人との間のみならず、物と人、自然物と人との間にも存在しています。食事を終えて席を立つ前に、その場に向かって頭を下げる人々を何度目にしたことでしょう。そうした仕草に部族的なものを感じるのですが、今日、「部族」という言葉には、否定的な意味合いがあるように思います。しかし私から見ると、アフリカでも古くから行われてきた、敬意を示す方法に大変よく似ているのです。

**あなたはカメルーン生まれでパリに育ち、オーストラリア人と結婚され、現在は東京でお暮らしですね。この国際色豊かなものの見方は、あなたのデザインにどのような影響を与えて**

**いるのでしょうか？**

**SM**：オーストラリアとフランスでの経験と、カメルーン生まれという生い立ちが、私の思考に新鮮な「空気」を運んでくれます。窓をいくつも開けた状態で思考しているようなもので、この空気はひとつの窓から別の窓へとかなりの速さで循環しています。ふと思ひ立ち、ひとつの窓を閉め、他の窓をいくつか大きく開けてみることもあります。もし、これらの国で暮らした経験がなければ、私はこれほどクリエイティブにはなりえなかったでしょうし、偏見なく物事を受け入れることはできなかったでしょう。

**日本の着物メーカーとのコラボレーションが刺激となって、「Wafrika」というブランドが生まれたということですが、布地はどのように選ぶのですか？ 選ぶ柄には、どのような意図がありますか？**

**SM**：日本に来てから、私は問い始めたんです。日本とは？ 日本人とは？ 日本文化の本質とは何か？ 日本についてこう問い続けるうち、自分自身についても問うようになりました。私の文化の本質とは何か？ 私の原点はどこにあるのか？ 私はここで何をしているのか？

デザイナーである私は、その問いに対する答えを文字で表すことはできません。だからデザインで表現するんです。日本を特徴づける象徴的なものをあれこれ見ていて、すぐに着物に惹きつけられました。着物は日本文化のシンボルのなかでも、もっとも力強いもののひとつだと思います。それから、私はカメルーンの窓を開き、アフリカの象徴としての布地の存在に気づきました。そこで、この2つの象徴的なものを重ね合わせることを思い立ち、アフリカの布地を使った着物をデザインしたのです。

実際には、着物のデザインは百歩のうちの最初の一步にすぎないと思っています。すべきことは、数限りなくありますから！ 可能性は無限に広がっています。西アフリカの価値観、文化、アイデンティティ、オブジェ、工芸品と、日

本のそれらとを合わせると、とめどなく流れるようにアイデアが生まれることがわかります。次の一步は、着るもの以外にも、触れたり、眺めたり、聴いたり、あるいは味わったりするものを作り出すことです。

デザインは、物語を語るようなもの。それは例えば、ティーカップのデザインであれ、カメラや車、あるいは着物のデザインであれ、変わりありません。よい物語には、ある程度の「あいまいさ」が必要だと思います。「Wafrika」プロジェクトのために、私はこのあいまいさを着物の中に生み出しうる布地を選んでいきます。それぞれの文化と価値観を尊重しつつ、2つの文化の間にひとつの物語が紡がれたとき、「三つ目の物語」、つまり第三の美が生まれるのです。それは、「ブルーノート」を奏でるための手段、すべての人の心を動かす手段となります。スタート時点では、アフリカと日本どちらにも属さないのに、最終的にはすべての人々に属するものを生み出すこととなるのです。

※ブルーノート：音楽用語で、音階中に半音下げた第3音または第7音。ブルースの特徴。

---

Wafrika [www.wafrika.jp](http://www.wafrika.jp)

着物制作＝小田章 [www.odasho.co.jp](http://www.odasho.co.jp)

撮影＝小林 鷹 [www.taka-kobayashi.co.jp](http://www.taka-kobayashi.co.jp)

ヘア・メイク＝木下庸子 (ants) <http://teamants.jp>

着物スタイリング＝中田純子

モデル＝木下由希子